

国土交通省 国土政策局 移住等の促進に向けた実証調査
長野県塩尻市 シビック・イノベーション拠点スナバの
コミュニティ・ゲートウェイ機能の体系化のための実証調査
実施報告書
(概要版)

令和7年3月6日

ミテモ株式会社

【問い合わせ】
ミテモ株式会社
シニアプロデューサー
三井 実
cue@mitemo.co.jp

1 調査サマリ（概要版）

（ア）調査の趣旨と目的

本実証調査では、移住等の取組の更なる促進のため、長野県塩尻市と連携してシビック・イノベーション拠点スナバの移住・二地域居住者の高い定着率に寄与する要因の調査・分析を実施する。

スナバの取り組みのどのような要素が移住・二地域居住者の増加に寄与しているかを明らかにするとともに、地域コミュニティ等の関係ステークホルダーに与える影響についても分析を行い、取り組みと当事者同士の内的な変化の体系化を行う。

（イ）調査方法

本調査では、スナバ参画者の理解や運営実態を把握するため、エスノグラフィー調査の手法を用いた。デプスインタビューや地域訪問による観察調査を実施し、移住者やスナバ運営スタッフ、地域のステークホルダーを対象に探索的なアプローチを試み、以下の項目について調査を行った。

- ① 二地域居住者・移住者が塩尻市に定着する要因
- ② スナバの機能と効果
- ③ スナバを介した地域コミュニティとの接点

また、調査結果はスナバ運営メンバーや調査対象者と適宜共有し、ワークショップを開催。これにより、運営スタッフや利用メンバーの視点を深めるとともに、本調査メンバーと共にスナバの解釈を深める場を設定した。

（ウ）調査結果

- ① 二地域居住者・移住者が塩尻市に定着する要因

多様なライフスタイルを受け入れるエリアごとに特徴のある地域性と地域でのなりわいを通じた継続的な地域との関わりが二地域居住者・移住者の定着に好影響

塩尻市の移住に関する地域特性を調査するために、JR 塩尻駅がある大門地区、集落文化が今も残る北小野地区、キャベツ農業が盛んな洗馬地区、中山道の奈良井宿や木曾漆器で知られる檜川地区の塩尻市内で移住者が増えている4地区にて現地フィールドワークを実施した。その結果、塩尻市は地区ごとに産業構造や文化が大きく異なり、それが移住者の多様なライフスタイルの受容につながっていると考えられる。

二地域居住、移住定住問わず、継続的に地域と関わり続けている者の共通点として、地域外での本業をリモートワークで行ったりワーケーションで地域を訪れたりするのではなく、地域でなりわいをつくり出し、そこから地域との関係性が生まれていることが挙げられる。また、現状のコミュニティと二地域居住先のコミュニティとのバランスや比重が後者に傾くことで移住につながっていると考えられる。

- ② スナバの機能と効果

相互理解を重視した運営プロセス、主体性の高い運営チーム、シビック・イノベーションのきっかけとなる場の設計というスナバの機能が地域でのなりわいづくりに寄与

スナバは、シビック・イノベーターを輩出するための独自の運営体制を確立しており、3つのカテゴリに分かれた10の機能を持つ。第一に「相互理解を重視した運営プロセス」として、入会前の理念説明やインタビューを通じてメンバーとスナバの相互理解を深める仕組みがあり、ポジティブスクリーニングが機能している。また、入会後のオンボーディングでは、メンバーの価値観や目標を対話型で深掘りし、主

体性を育む環境をつくる。第二に「主体性の高い運営チーム」の存在が、スナバのカルチャーを維持する重要な要素となっている。スタッフ間での定例ミーティングや Trello を活用した情報共有により、適切なマッチングが行われ、メンバー同士の協働機会が生まれやすい環境が整っている。また、スタッフがメンバーと対等な関係でプロジェクトを進める伴走支援を行うことで、シビック・イノベーションを生み出しやすい土壌が形成されている。第三に「シビック・イノベーションのきっかけとなる場の設計」として、新メンバーの紹介イベントやバイネームでの個別イベント告知、交流の場となるブレイクキッチンの設置など、偶発的な出会いや対話を促す工夫がなされている。また、シビック・イノベーター支援プログラムを通じて、実践的な学びとアクションの機会を提供することで、メンバーの主体性と地域へのインパクトを強化している。これらの機能が相互に作用し、スナバの理念に共感するメンバーが集まり、シビック・イノベーションを推進する土壌が形成されている。

③ スナバを介した地域コミュニティとの接点

二地域居住者・移住者と地域とのハブを設置するのではなく、彼らのプロジェクト起点で地域側が巻き込まれる形でコミュニティが形成

調査設計段階では、「スナバが行政や外郭団体、地域団体と組織的な連携を行う」「スナバ内に関係案内人のような地域外の人と地域住民をつなぐ役割を果たす人材を配置している」「スナバメンバーと地域住民が交流できるイベントを頻繁に開催している」など、二地域居住者や移住者が地域に入り込むための機能をスナバが提供していると想定していた。

実際に調査を進める中で、一人の人物が複数のプロジェクトに関わっており、その関係性が多層的であり、受け入れられた側が受け入れる側に、スタッフがプレイヤーになるなど、常に役割が変化していくことで多様なプロジェクトが生まれ、スナバメンバー発のプロジェクトに地域が巻き込まれていき、その思いに共感して、組織というより個人として関わって、所属している組織をうまく利用するというような、なりわいを起点として地域コミュニティに接続するという構造になっていることが明らかになった。

(エ) 考察

二地域居住者・移住者の地域定着、コミュニティ形成を超えた「ローカル経済圏の好循環」に

スナバは「生きたいまちを共に創る」というビジョンを掲げ、二地域居住者や移住者を含むスナバメンバーがオンボーディングや交流を通じて共通の価値観を持ち、協働を生み出している。スナバ発のプロジェクトは地域課題の解決を目指し、地域のステークホルダーを巻き込みながら発展していく。結果として、スナバのビジョンが地域に浸透し、移住者を呼び込む好循環が生まれていると考えられる。

